

桜日本を訪れる

外客にせめて

世界的大工事を背景とする

特集

サクラのバトン

このオラガ分水の桜をも

見せてやりたやの

気分になるのである

文章

山宮半四郎（名誉市民）の
新潟新聞社地藏堂支局記念
号への寄稿文『国華を愛せ』
（昭和11年）より抜粋

写真

多くの人出で賑わう大河津
分水の桜並木（昭和30～
40年頃と推定）〈山宮家所
蔵アルバムより提供〉

サクラのバトン

「大河津分水の桜並木」。華やかに春の訪れを告げる桜は、燕の春の風物詩です。その起源は、人々を洪水から救う大河津分水路の建設を記念し植樹されたことから始まります。

今号では、「大河津分水の桜並木」がどのように生まれ、現在に至るまで受け継がれてきたのか、その歴史を紹介します。

◀昭和31年7月 大河津分水を視察する皇太子時代の明仁上皇陛下（右側中央）と出迎える山宮半四郎（左側右端）
〈山宮家所蔵アルバムより提供〉



◀雪が積もる田沢実入の墓（新潟市南区白根古川）。春を迎える4月には、大河津分水通水100年を前に実入の慰霊祭が行われる予定

父から子へ 通水のバトン

01 - Key person -

父と共に願った大河津分水路



田沢実入 (1852～1928)
庄屋の子として古川村（現・白根）に生まれた

1922（大正11）年8月に通水した大河津分水路。その建設に大きく貢献し、大河津分水に桜を植え始めた人物がいました。それが田沢実入です。田沢家の治水への想いは父・与一郎から始まりました。早くから大河津分水路の建設の必要性を訴えていた与一郎。その成果もあり、1870（明治3）年に第一次大河津分水工事が始まり、5年後に完成しました。しかし、5年後に父と想いを共にした実入は、大河津分水路の建設に向け、治水運動を展開する会社を創設するなど、工事の再開を訴えました。

1883（明治16）年、実入は新潟県議会議員に初当選し、大河津分水実現のために東京へ請願を続けました。そんな中、病で倒れた与一郎から「大河津分水工事再興の志を受け継ぎ、達成に努力せよ」との遺言を託されます。実入は父の想いを受け、これまで以上に大河津分水路の建設を強く訴えました。

今も大河津分水を見守り続ける

私財を投じた活動を続けた実入は、1886（明治19）年に新潟県議会議員を辞職。その後は新潟県土木課の職員、さらには内務省へ入り、全国各地の土木行政を転々とし、地主から官職へ身分を変えながらも、大河津分水路建設にこだわり続けました。

1909（明治42）年、念願叶って第二次大河津分水工事が始まると、実入は内務省の技師として工事に従事。大河津分水が通水した翌年の1923（大正12）年に内務省を辞職しました。その時の年齢は71歳。生涯を大河津分水路建設に捧げた実入にとって通水の喜びは計り知れないものだったでしょう。

大河津分水の通水後、実入は桜の育成を目的に設立された「信濃川大河津分水保勝会」の初代会長となり、現在まで続く「大河津分水の桜並木」の礎を作りました。

実入の地元・古川村（現在の新潟市南区白根古川）に建てられた墓石は、大河津分水の方向を向いています。その生涯をかけ、大河津分水路の建設と現在の桜並木の礎を作った田沢実入は、その生涯を閉じた後もなお、大河津分水を見守り続けています。

桜を広め、日本有数の名所へ

山宮半四郎は、地蔵堂町（現在の燕市地蔵堂）の生まれで、田沢実入とともに桜を植え始めた一人とされています。

大河津分水の建設が始まると、この大仕事を後世に伝えるために一帯の公園化を企画、有志を募り私財を投じて桜の植樹を行いました。その後、1924（大正13）年には「信濃川大河津分水保勝会」を設立し、理事として初代会長の実入と共に活動を行いました。半四郎は大河津分水路建設に尽力した実入を「大恩人」と尊敬していたと伝えられています。実入の後、保勝会の会長となった半四郎は、さらに桜の植樹に力を入れ、約6千本の桜を植えたと言われています。また、戦争で一時中断を強いられた「おいらん道中」の復活にも尽力し、「大河津分水の桜並木」を一大名所となるまでに発展させました。

日本の桜から世界の桜へ

半四郎が1936年（昭和11）年に新潟新聞社地蔵堂支局記念号に寄せた「国華を愛せ」という寄稿文の中に次のような一節があります。

「桜日本を訪れる外客にせめて世界的大工事を背景とするこのオラガ分水の桜をも見せてやりたやの気分になるのである」

自身を大の花好きと称した半四郎は、「大河津分水の桜は日本全国に知られるようになった。今後はさらに、桜の国として日本を訪れる外国人にもぜひ、桜の名所として足を運んでもらいたい」と述べています。

世界的大工事を記念した大河津分水の桜が、多くの人々を惹きつける新たな名所になるようにと願った半四郎。その想いは時を超えて受け継がれ、現在も春の訪れとともに多くの人が桜を見るために大河津分水に集まります。

偉業を後世へ 植樹のバトン

02 - Key person -



山宮半四郎 (1882～1968)
旧地蔵堂町生まれ、町会議員・町長を務めた名誉市民



山宮家のアルバムの中に「大恩人」とつづられる田沢実入の写真と記事
〈山宮家所蔵アルバムより提供〉

守り継がれる サクラのバトン

04

- Interview -



よしだ こうさく
吉田 幸策 さん

認定 NPO 法人 分水さくらを守る会・理事長

「私たちの活動は、『地域の自然環境を守る』『桜文化を守り分水工事の偉業を後世に伝える』『国上山周辺の景観等を守る』。この3つの達成を目的としています」
吉田さんが理事長を務める「分水さくらを守る会」は、田沢実入・山宮半四郎が設立した「信濃川大河津分水保勝会」の流れを汲む団体として平成9年に発足。桜を守り、次世代へ受け継ぐ活動を行っています。
「活動内容は、苗木の育成や桜の下枝の剪定など。特に剪定作業に関しては、毎回多くのボランティアの協力を得ながら桜並木の保全に取り組んできました」

「最近では、なぜ大河津分水に桜並木があるのか知らない人も多いと思います。ぜひ、この『大河津分水の桜並木』に愛着を持ち、誇りに思ってください。この場所がこれまで以上に桜の溢れる名所となるよう願っています」



分水さくらを守る会の活動風景。不要枝の剪定作業をしている様子です

治水のシンボルとして100年以上にわたり受け継がれてきた桜並木。しかし、その歴史は平坦なものではありませんでした。

「実は、100年前の通水後、戦争や度重なる工事によって大河津分水の桜並木は伐採や移植が繰り返されてきました。それでも、現在に至るまで美しい桜並木が残るのは、その時々の先人たちが努力し、守り継いできたからに他なりません」
豪雨を幾度も流してきた大河津分水、その恩恵を受け今の私たちの暮らしがある。と話す吉田さん。桜並木は先人たちの想いを背負い、未来に繋ぐバトンの役割を果たします。

03

- Interview -



おおはし
大橋 チイ さん

田沢実入のひ孫にあたる。新潟市中央区在住

「とにかく『大河津分水』のことばかり考えていた人。実入おじいさんはそんな人だったと聞いています」
そう話す大橋チイさんは、田沢実入さんのひ孫にあたります。直接本人と会うことはなかったチイさんですが、母からよく聞いていたという人柄を話してくれました。
「困っている人のために動く人だったでしょう。私財を投げ打ち、持っていた田んぼや屋敷もすべて売り払ってもおな、洪水などの被害に苦しむ人々を救いたかったのだと思います」
没後50年の節目には、実入さん自作の和歌の入った掛け軸が親戚に配



夫・孝さんとともに自宅に保管する資料に目を凝らすチイさん

「古い資料は多く残っていますが、実はあまり詳しくは分からないんです。通水100年の節目に、先祖が残してくれた歴史をもう少し調べて、次の世代にも伝えていきたいですね」

「お墓参りには、山宮半四郎さんも度々いらしてました。母に聞くと、おじいさんが大変お世話になった人と教えてくれました。また、本人は断つたようですが、生前、これまでの活動を讃えて銅像を建てようという話も出ていたみたいです。たくさんの人たちを助け、そして慕われていたのだと思います」
大河津分水の通水から100年。改めて実入さんの活躍に想いを馳せる大橋さん。

さくらフォトヒストリー

昭和10年頃から現在までの「大河津分水の桜並木」の様子や人々の賑わいを写真で紹介いたします。



- 1 昭和10年頃のおいらん道中
- 2 昭和20年頃の桜と可動堰
- 3 昭和30年頃の大河津分水の桜並木
- 4 昭和40年頃のおいらん道中
- 5 おいらん道中（現在）
- 6 大河津分水の桜並木（現在）
- 7 燕さくらマラソン（現在）